
Dig me Dream

地藤零一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D i g m e D r e a m

【Nコード】

N 9 6 2 0 P

【作者名】

地藤零一

【あらすじ】

夢の世界で少年は”夢見”と名乗る少女と出会う。
失くした記憶のかけらを探しに、まどろみの中へ。

s c e n e 1

それは夢。

水の中を漂うような、希薄で、透明な夢。

水面に薄膜のような光が揺れている。

身体の周りから、たくさんの泡が立ち上っている。

赤い泡。青い泡。緑の泡。黒の泡。色んな泡を引き連れた、クラゲのような七色の泡。

ゆらゆら揺れて、水面へと昇っていく。

下を見た。何も見えない、吸い込まれるような闇がただ広がっていた。

泡は自分の身体から滲み出していた。

見渡せど果ての無い、広大なその海の中で、自分は一人きりであることを知って、どういうわけか安心する。

こんなにも静かで、穏やかなのだから。

波に任せて、いつまでもたゆたっていたい――

水面が遠くに落ちていく。

色つきの泡が抜けていく身体は、どこまでも深く沈んでいく。

「そう、これは夢です」

二ノ宮太助は目を覚ました。

二ノ宮は寝相が悪い。

寝ている間に掛け布団はベッドの外へと追いやられ、寝巻きはめくれ、腹が丸出しになっている。左に首を巡らすと、律儀に一日一回の役目を果たすタヌキ時計は、就労開始五分前でまだぐっすりと眠っているし、擦り切れるほどやり込んだテレビゲームの特典ポスターも、変わらず部屋に彩りを与えている。日に照らされた埃が、きらきらと軌跡を描いている。

いつもの朝だった。

「やっと起きましたね。まったく手間取らせないで欲しいのです」
寝ぼけていた。まだそんな声が聞こえた。二ノ宮は耳をほじほじ、体を起こし欠伸する。

「顔を洗つてくるがいいのです。そしたら目も覚めるのです」

「うるさいなあ。母ちゃんかアンタ」

幻聴の発信源はベッドの横で正座していて、静かにこちらを眺めていた。

白のシャツに燕尾服のようなベストを着て、膝小僧の隠れるくらい長いソックスを履いていて、頭の上にキノコみたいな丸帽子を載せている。

飛び退いて壁にぶつかる。

部屋に、知らない女の子がいた。

「……………アンタだれ？」

「人間、ではありません」

「小学生かよ！」

「嘘じゃないのです。信じやがれなのです」

二ノ宮の知り合いに該当する項目が、この女の子からは見つからなかった。

まず、朝起きたらいきなり部屋に上がりこまれていた、という状況が飲み込めない。そんな親しい知り合いはいないし、酒は飲まない年だし、昨日は普通に学校から帰って、ゲームをしてテレビを見て風呂に入って寝床に着いたわけだから、二ノ宮の日常を脅かすような交流はついぞ無かったはずなのである。寝ているあいだUFOが来て攫われて記憶を書き換えられて、地球の生活に溶け込もうとする宇宙人の陰謀で、知らぬ間に侵略されて地球がやばい大ピンチ説を頭を振って追い払い、実は親戚か誰かが海外転勤、そのあいだ家で娘を預かることになった。となんとか、ありえそうでありえない妄想が頭の中を駆け抜けていった。

「あ、ああ……もしかして、銀次郎叔父さんの娘さん？ ほら、ひ

い爺ちゃんの葬式で一度会ったよね」

「誰ですかそれは。私はまったく赤の他人なのです」

いよいよ黙る。

真つ赤な他人が、どうして部屋に？

「混乱しているようですね。顔を洗って出直すことをオススメするのです」

言われるままに部屋を出た。

一階の洗面所。ぼけっとした顔を鏡に映し、冷や水を叩きつける。前髪からしたたる水滴。

顔を拭く。爽やかな朝だった。

——通報しよう。

玄関前までとすどす戻り、靴箱の上の電話にいちいちゼロと高速タッチ。朝起きたら不審者がいて部屋に居座ってるんです。恐怖です。早く何とかしてください、だ。もはや清々しさがあつた。相手の言い分さえ聞く耳持たない。

受話器は、呼び出し音のみをそのまま五分以上続けた。

居間に入る。

いつもなら母が朝食を作っていて、父が新聞を読んでいて、婆様が茶を啜っているルーチンのはずである。休日だって変わらない。

ただその日はたまたま誰もおらず、

外で雀の鳴き声が聞こえ、

家鳴りの音が大きかっただけだ。

……息子に内緒で親子水入らずの旅行。

——熱心な睡魔のせいでまだ夢の中。

あるいは部屋の時計が狂っていて、実はもう昼でみんなお出かけ。どれだろう。

時計も確認し、それぞれの部屋も確認し、携帯電話に誰も出ないことを確認すると、大人しく自室に戻った。そこにはやっぱり女の子がいて、テレビに向かって、悪の組織に盗まれた正義の超兵器を取り戻すため、たった一人で敵本拠地に乗り込むヒーローになって

いた。

「……………何してるの？」

「ゲームですよ？」

電源をたたつ切る。

不思議そうに二ノ宮を見上げ、

「喉が渴いたのです。茶を淹て欲しいのです」

「なんでそんなに我が物顔なの！ アンタ誰だよなんでここに居るんだよ説明しろっ！」

「口が悪いですね。言葉を慎むがいいのです」

「どっちが。なに、泥棒？ 見つかったんだから逃げるとかしたらどうだよ」

「私をそんなふうに見るとは失礼千万なのです。罰としてあなたの日記をさりげなく通学路に置いて不特定多数に読まれては蹴られる辱めを受けさせてやるのです」

「何様？ ちよっ、やめっ」

「『六月十九日、晴れ。今日学校の帰り、たまたま向かいのアパートに住んでいるお姉さんと一緒になった。家のゴミを出すときなんかによく顔を合わせる。いつもお姉さんの方から話しかけてきてくれて、かなり気さくな人だと思う。テレビの話とか、夕飯を何にするかとか、今彼氏がいないとか話していた。薄着だったので、ちよっどドキドキした』……………ドキドキとか……………」

「人の日記音読するなよ！」

必死で日記を取り上げた。ケツに敷いて座り込んで、真っ赤になった顔で怒鳴った。

「アンタ一体なんなんだよ！」

「私は”夢追人”ゆめおいびとですよ」

「——は？」

「これは夢ですから」

少女は、二ノ宮の正面に正座した。

「現実世界で二ノ宮太助はまだ寝息を立てているのです。今私が話

していること、あなたが体験していることは全部夢の中の出来事なのです。だから他の家族がいないし、電話がどこにも繋がらない。外に出ても、誰にも会うことはできない」

窓から差し込む日が眩しかった。

鳥の鳴き声が耳に透き通るようだった。

さつき洗面所で浴びた水は冷たかったし、尻に敷く日記の感触は跡が残りそうなほど生々しい。視界には自室の風景が何の感慨も無く溶け込んでおり、彼女の口にした日記の文は一字一句違い無く自分が出したためたものだ。

「なに、夢みたいなこと言ってるんだよ」

「夢ですから、仕方ないです」

「だーからー！ もっとこっちの解る言葉で話してよ」

「面倒です。この説明の手間だけは省略できないから嫌なのです」

言って、手を取られた。ずいずいと引つ張られ、パジャマ姿のまま二ノ宮は庭先に引つ張り出された。朝特有の湿つぽさと、太陽の匂い、だいぶ上がり始めた朝日に首筋がちりちり焼かれる。貫くような眩しい光に目の奥がずきずきやられる。

「なん、なんだよ、いきなり引つ張ってきて」

「百聞は一見にしかないです。あなたの大好きなお姉さんが住むアパートを見てみるが良いですよ」

いちいち引つかかるなあと思いつながら、我慢して見てやった。

まったく、何ひとつ、いつもと変わらない古びたアパートが建っていた。

道路に面した駐車スペースが部屋の数だけ並んでいる。外壁にところどころヒビが入っていて、明らかに即席で済ませた白い補修の跡が哀愁を漂わせ、赤錆だらけの階段にトタン屋根が乗っかっていて、雨の日は滝壺と化すであろう雨どいの壊れたままの階段の入り口には、半年前からずっと出前のドンブリが放置されている。雨露を凌ぐ以上の命の危機を回避できないボロ屋が、今日も平和に日に干されていた。

「これが、なんなわけ」

「こつちに来るのです」

アパートの敷地の中にまで引つ張られ、物置長屋に沿って歩いて、奥の塀まで連れて行かれた。その塀を越えると民家だ。ほんの数年前に建てられた分譲住宅で、庭木がしっかりと手入れされていて、なぜか門の上の蜘蛛の巣だけはいつまでの取り払われない。

「塀とアパートのあいだを、よく見るのです」
「見る。」

人が一人肩を広げて歩ける程度の狭いスペース。各部屋分のガスボンベが整然と並べ立てられている。その隙間からは向こう側の道路が覗き、一見、どんな違和感も読み取れない。

一見以上して――

アパートの一部の壁が、こっそり抜け落ちているのに気付いた。

s c e n e 2

もつと近づいて、見た。

そこにあるものが理解できない。

壁の抜け落ちたアパートには、まったく中身が無かったからだ。
がらんどろ。張りぼてだ。

くぐって、中に入ってみる。

屋根さえない。二階分の立て板が四方に組まれているだけで、まるで映画のセットのように古アパートに見せかけた板がそびえ立っているだけなのだ。

呆然と空を見上げる。

「なんだ……これ？」

まだ二ノ宮は正気でいられた。

「どういうことコレ？」

「言ったはずです。これは夢なのです。あなたの見てきた世界に、夢の中で私が形を与えた作り物なのです。だからあなたが見てきた以外のものは作れないし、あなた以外の人物を登場させることもできない。ここで独立した意思をもって行動できるのは、夢の中に放り込まれたあなたと、夢の世界を形作った私だけなのです」

「なんで、そんなこと」

「あなたが夢を忘れてしまったからなのですよ」

詩のように口ずさんで、彼女は横を通り過ぎていった。アパートの張りぼてに沿って内周を歩いていく。現実感の無い風景など想像の中の感覚でしかなく、いま目に見えている光景や、匂いや、風の感触、遠くで響く音が、二ノ宮の立ち位置を見失わせてはくれなかった。

彼女は内壁の角で立ち止まって、その場にしゃがみ込んだ。

足元には、獏がいた。

獏。

獾と、言ったら、四足歩行の哺乳類、ウマ目バク科の獾だった。しかも白黒の、絶滅危惧種のマレーバク。子犬程度の大きさで、見下ろされているのも気にせずむしゃむしゃ何かを頬張っている。

読めてきた。

これは夢だ。

何かを先に言われる前に張りぼてから離脱した。駐車スペースを突っ切って、自宅に駆け込み部屋に戻るや否や毛布を被って目をつむる。夢なのだろうから、また寝て起きればきつとなんとかなるはずである。羊を数えてみようじゃないか。毛刈り前のもこもこなのが想像上の柵を跳び越え一匹また一匹と草原から逃げていった。牧場主は大変だろう。逃げ出したのをかき集め連れて帰らなければならぬし、こんなにも集団で柵を越えられたのだから、もっと高い柵を立てねばならないし、牧羊犬は大忙しで、よくよく見れば目が恐いから、悪魔に喻えられるのも無理からず、あ、いま羊に混じって獾が――

ゆさゆさ揺さぶられた。

「起きてください。いい加減にするのです」

「……うるさい。僕はもう寝るって決めたんだ」

「なら私は、あなたを起こすと決めました」

ゆさゆさゆさ――

ひたすらにこれは夢だと思い込んだ。

二ノ宮はただ眠りに落ちることを至上の目的として、心頭滅却に勤しんだ。瞼の下から光を消して、布団の中にいるという意識さえも外に追いやり、暗い海の底に沈んでいくイメージを指先までに浸透させる。

徐々に意識が切り離されて、いつしか心に静寂が訪れていた。

やればできるものだなあ。

「六月二〇日、晴れ／曇り」高架下の捨て犬に給食の残りをあげに行った。こいつはいつもここにいる。初めて見つけてからもうずいぶん経つから、ダンボールの犬小屋を抜け出してどこかに遊びに行

ったりしているのかもしれない。僕がここに来る時間だけは覚えていて、そのときにだけ帰っていたり……。とにかく僕はこいつがここから抜け出してどこかに出かけているところを見たことがない。まだ仔犬でも犬なんだから散歩のひとつもしてしまうと思う。でも、野良犬は捕まえられるし、捕まったら殺されるし、ウチで犬を飼うことはできないから、早くなんとかしないといけない。父さんに相談したら放っておけて言われた。今度先生に」

「——ひとの日記読むなあああ!!」

実際揺さぶられていなかった。毛布を蹴飛ばし必死で日記を奪い取った。ベッドの下の深くに突っ込み憤然と少女を睨む。

「現実逃避は良くないですよ」

「何が現実だよ！ 早く家に帰してくれよ！」

「あなたが夢を取り戻さない限り、あなたは夢から覚めないのです」「意味が分からないよ……さつきからユメユメって、寝てるならいつか起きるだろ」

少女は静かに首を振った。

「あなたは記憶の一部が欠落しているのです。そんな状態で起きたとしても、眠るたびにまた何かを忘れる。獺を頭の中で飼っているから。色の濃い記憶から真っ先に食べられてしまうのです。そのまま過ごせば、いずれ目を覚ますことさえ忘れてしまうのです」

「獺って、夢を食うあの獺のことだよね」

「そう、この獺なのです」

目の前にずいっとマレーバクを突きつけられて、二ノ宮はひっくり返った。

「家の中に持ってくるな！」

「中国で獺は人の悪夢を食べる動物として語り継がれてきたのです。東洋独特の文化ですね。空想上の獺は体が熊で鼻が象、目は犀、尾は牛、脚は馬と言われていますが、喩えのスケールがいちいち大きいのです。足して十で割るくらいが丁度良いのです」

「これはもつと小さいと思うけど」

「いちいち細かいのです。お前の心が小さいのです」

なんでそこまで言われなくちゃいけないのだろう。二ノ宮はなんだか悲しくなってきたやうな瀨無くうな垂れた。

「……で、その獺が僕の記憶を食べちゃうんだ」

「そう」

「それで、放置してるといつか僕の記憶が全部食べられちゃうんだ」
「その通りなのです」

「だから、そうならないようにキミが獺を捕まえて元に戻してくれるんだ」

「まことに重畳なのです。わかってるじゃないですか」

「アホくさ。寝言は寝ながら言つてよね」

ベッドに戻って寝転がった。もう付き合っていてられない。そんなメルヘンみたいな話は、子供の寝物語にでも聞かせてやって欲しい。「まだ信じていないのですね。家族が何も告げず息子を一人残して家を空けるのも、電話がどこにも繋がらないのも、外に出て誰も見かけなかったのも、がらんどうのアパートも、道端にいるはずのない動物も、やけに平べったい遠くの景色も、全部見ないふりをするのですね」

「うるさい。お前が連れてきたんだろ。お前がなんとかしろよ」

「獺はこの世界のどこかに隠れて、今もあなたの記憶を貪っています。失った夢は、あなたにしか解らないのです。獺を見つけるには、あなたの協力が必要不可欠なのです」

相変わらず平坦な声だったけれど、二ノ宮はそこに懇願するような真剣さを感じた気がして、身体だけ彼女の方に向けてやった。

「あんた……名前は？」

「私の世界に個人の名を指す概念はありません。不便であれば、便宜上？夢見ちゃん？ともお呼びください」

「適当すぎる……」

後ろから前肢を掴まれて直立させられている獺は、何が楽しいのか「かくっ、かくっ」と鬱陶しく鳴いている。黒地に白である。

「で、その猥が夢を食べるって話は解るんだけど、解るってのはそういう言い伝えがあるのを知ってるってだけなんだけど、実際僕が記憶を食べられたとして、全然そういう自覚が無いんだけどさ」

「少しは頭を使いやがれです。忘れさせられたなら、覚えてないのは当然なのです」

「なんでそんなに抑揚ないんだよ……怖いんだけど」

「例えば、あの日記です」

怖いくらいに曇りの無い瞳で、真っ直ぐに二ノ宮を見据え、夢見は言った。

「六月十九日の記述。？向かいのアパートのお姉さん？とは、具体的にどれくらい前に知り合ったか覚えていますですか？」

「覚えてるよ。僕が小学校の六年生になったばかりの頃に引越してきたから、三年くらい前だよ。近所の大学の……ふたつあるけど、どつちかに通ってる学生だと思う」

「朝によく顔を合わせるともありましたね。ご近所付き合いとしては、他に何かなかったのですか？ 家に招かれたとか、雨の日に傘も差さずに帰宅するところを見たとか、つい思春期の情動に身を任せカーテンの隙間から望遠鏡とか」

「いやな想像するなよ！ 小学生のときは何回か遊びに行ったことがあるけど、さすがに今はもうないよ」

「それでも？向かいのアパートのお姉さん？ですか？」

何が言いたいのだろう。

唐突に、ぞくりときた。

「小学生くらいの子供が、そんなに歳離れた誰かの家に遊びに行つて、ご両親は何も関心を示さなかったのですか？ それ以前にあなたは気にならなかったのですか？ そのお姉さんとやらの名前のことは」

そうなのだ。彼女の名前のことを知らなかったのだ。

自分で言うのもなんだが、ただの顔見知りと言うほど淡泊な付き合いではなかったと思う。世間話は尽きるほどしたし、愚痴っぽい

こともたくさん聞いた。互いに名前を知らなかったからこそ気兼ねしなくていい仲だったのかもしれないが、彼女のことを異性として意識していたのは確かだし、考えれば考えるほど、名前を一度も聞かなかったことに不自然さを覚えてくる。

「あなたが、名前を知らないはずがないのです」

夢見はゆっくり断言した。

それはまるで、預言のように。

「この日記の記述には、本来彼女の名前が記されているはずでした。しかし、その部分を獺に食われた。だからあなたは、矛盾が生じないように記憶を自ら補完したのです」

「自らってどうやってさ。この日記には実際に？お姉さん？としか書いてないじゃんか」

ベッドの下から、件の日記を引っ張り出して、該当の箇所を洗いだした。六月十九日。やっぱり「お姉さん」としか書いていない。万年筆で、自分の筆跡で、紛れもない自分の日記に。

「言ったのです。これは私が、あなたの記憶から作り出した夢の世界だと」

獺の背中を、夢見は軽く叩いた。

ひきつけでも起こしたようのけぞり、棒のように四肢を伸ばして、全身の毛を逆立てたかと思うと、口から――泡を吐き出した。

それは水の中に発生するような細かの気体の群れだ。色がある。だいたい赤と青。色つきの泡が水圧の差に苦しむように上へ上へと昇っていく。彼女がまた背中を叩くと、ごぼっ、ごぼっ、と、もがきながら獺は泡を吐き出していった。

青の泡、赤の泡が、二ノ宮の見る前で、天井に吸い込まれていった。

どこかで見たことがある。

自分が海の中にいて、どんどん泡を吐き出していくイメージ。それは、紛れもなく、夢の中の出来事だったはず。

「世界が正しく再構成されたのです」

日記帳に目を落とした。

『今日学校の帰りにたまたま未空さんと一緒になった』

忘れようもない。

越して来たその日から二ノ宮は彼女にこき使われたのだから。白いトラックが家の前に止まっていると思ったら、荷物の棚が上がったり下がったりしていたので、野次馬根性全開でトラックの後ろに回りこみ、そこで四苦八苦している彼女に出くわしたのだ。どうやら重くて降ろせないらしい。そのままぼけつと眺めていると、彼女の方が業を煮やして声をかけてきたのである。そこで初めて助けの要る状況だと気付いて慌てて手を貸し、荷台からタンスを降ろし部屋の中まで運んであげた。よし次、とあまりにも自然に言うので何のことが解らなかった。

全部の荷物を運び終えた、確かに彼女はこういったのだ。

『あたし三田村未空！ よろしく！』

二ノ宮の人生の中で、かなり上位に食い込む印象だったという。

「思い出しましたね」

「……忘れてたのが嘘みたいだ」

泡を最後の一滴までしぼり出された獏は、ケロリとした顔で鼻をすんすんさせている。夢見は獏を小脇に抱え、部屋の隅にあった籠の中に入れて上から鍵を掛けた。

「——これが私の仕事です。彼らはあなたと因縁の深い場所にしか現れないので、そこだと思っ場所へ、あなたに案内してもらう必要があるのです」

「わかった。協力するよ」

悩むまでもなかった。

夢の中で、二ノ宮の奇妙な夢探しは始まった。

scene 3

着替えて家を出ると、付いて来るがいいですと言う夢見に従い二ノ宮はその隣に並んだ。彼女の服装のせいで自分が普通の住宅街を歩いていることに場違いさを覚えながら、見慣れた風景を撫で回すように再確認した。そこは、紛れも無く自分が今まで眺めてきた景色だったが、どことなく作りが甘かった。解像度の低い写真を見せられているような、ポリゴンの少ないゲーム世界を歩いているような、定規で線を引いて描かれた絵画のような安っぽさが感じられたのだ。

二ノ宮の知る現実と決定的に違うことは、人を一人も見かけないことである。

やはりここは、二ノ宮の知る現実世界とは違った。

「……人気のない遊園地にいるみたいだ」

「周りの風景にリアリティが無いのは、あなた自身の現実に対する認識が甘いからです。まあ、たいていみんなこんなですけど。自分の家だけ作りが細かいのは年中見ているからですな」

「ふーん……そういえばさっき言ってたけど、色の濃い記憶から食べられていくって」

「獺の嗜好です。身近な記憶ほど色は濃く、特に何度も想いを馳せる類の思い出や夢は、彼らにとって大好物なのです。部屋の配置なんかは身近でもどうでも良い事柄なので手つかずでしたが、早く全部捕まえないと二度と思い出すことができなくなるのです」

「やだなあ」

「通常はそうなる前に、私たちが見つけ出すか、彼らが満腹になるかするはずですけど、一度に入られた数が多いと、あつというまに思考する能力も失われてしまうのですよ」

「なんか獺って言うより、脳の病気みたいに聞こえるね」

「現実に現れる疾患としてはまったく同じことです」

じわじわと心の底に危機感が溜まっていった。

夢みたいなことばかり言われていたから、それが現実としての死に繋がった途端、身震いするほど不安になってくる。

「どこを探せばいいんだよ」

「それは、あなたにしかわからないです」

素っ気なく言われて焦った。自分の記憶を頼りに、自分の記憶の欠けた箇所を見つけなくてはいけないのでは、それは大いなる矛盾だった。さっきの名前もそうだが、抜け落ちた箇所に穴が開いているのではなく、自動的に補修されているなら、自分で見つけることは難しい。

「どうせ人の記憶なんて、埋め合わせだらけの矛盾だらけなのです」

「じゃあ、どうすればいいんだよ」

「あなたの性格を知っているのは、あなた自身が一番のはずです。あなたが今日このときまでどんなふうに生きてきたのか、どんな人間として構成されてきたのかを知っていれば、自分がどんなとき何を思っ、どう動くのか解るはず。そこに自分としてそぐわないものがあれば、それが抜け落ちた記憶の正体なのです」

自分を一番良く知っているのは、自分自身。

そんなふうに意識したことはなかった。

自分自身について、明確なイメージを持って過ごしている人はごく少数だろうし、その中に自分が含まれているとは到底思えない。

簡単な言い方をすればそれは自信というやつだ。

自信なんて無い。明確な自分なんて無い。

なんだか鬱な気分になる。

「……どうせ僕なんてちっぽけな人間だよ」

「しっかりするのです。卑屈になってるヒマがあったら少しは頭を動かすのです、このウジ虫」

悩む権利もないようだった。しかし、考えて分かるものなら外を歩く必要はないと思うのだけれど。

「どこに向かっているの？」

「ただの散策ですよ」

「え？　なんで暢気に？　獭探しじゃないの？」

「あなたの抜け作りにはほとほと呆れるばかりですね。いいですか、普段から目にしている風景の中を歩けば、そこから思い出が喚起されることはまああることです。そうすれば獭を見つけるヒントくらい得られるかもしれないじゃないですか。下らないことに気にしてないで、あなたは見慣れた町並みに目を向けてやがれです」

「ふあい……」

見慣れた町並み、と言われても一度気付いてしまうと違和感が付きまとうのだが、文句を言うともた怒られそうなので、二ノ宮は沈黙を財産とした。

辺りを見渡す。程よく拓きかけた田舎にある住宅街の境目を抜け、精米所を左に折れて酒屋と駄菓子屋のあいだを通り坂道に入った。二階建て家屋よりも低い勾配を登り切ると、視界が開け、そこから先には堤防があり、25メートルよりは幅の長い河川があつて、白鳥が群れをなし川辺で会議を開いていた。その向こうに見えるのは地平線さえ見渡せる広大な田園地帯だ。

堤防に沿って歩いた。

散歩なんて久しぶりだ。

二ノ宮だつて小さな頃はもっと出歩いたりしていた。けれどそれも、友達の家に行ったり釣りに行ったり空き地で遊んだり、目的あつて動いていたことなので、ただなんとなく外に出て景色をゆつくり眺めていたことはなかったのだ。それは、もつと昔のこと。小学校に入るよりも前、友達同士で外に出て遊ぶ習慣さえなかった頃。家の中より面白い場所を探して、自分の知らないものを探して、この町で冒険をした無垢なガキンチョだつた頃。

「……あれ？」

記憶がぐらついた。

思い出せない。

「どうしたのですか？」

既視感だった。前にもこんなふうなことがあった気がしたのだ。

こんなふうなこと、とは、果たしてどんなことだろう。それさえも分からない。堤防沿いの道を歩いたことは、数え切れないほどあるはずなのに、何かの状況が、今の状況と似ていた。どうして似ていると思いつたのか分からない。

「何か見えたのですね？」

「うん……だけど、なんだと、結びつかないんだ」

「なら放っておくのです」

「——え？　なんで？」

「論理的思考は思いつきの妨げなのです」

意味が良く分からないけど、それは論理的に考えるより思いつきの方が大事だということだろうか。

「さっきまで散々頭使え頭使えって言われてたんですけど」

「綺麗な町なのです」

「あれ、誤魔化した？」

切り立った道からは、町の風景が遠くまで見渡せる。視界のずつと向こうには、繁華街の先から地平線まで、線路橋がひた走っている。河のこちら側には民家が集中していて、駅に近くなるほどその密度が増していった。二ノ宮が住んでいるすぐ手前の住宅街は、まだ開発中なので、空き地の部分かなり広い。三年前くらいにできた堤防沿いの屋内プールが視界の三割を遮っている。

綺麗な町、なのだろうか。地元住民としては田舎なので景観よりも不便さが先立つ。

ときどき思いついたように会話しながら、てくてく歩いていった。やがて車道に出くわした。向こう岸まで横切る橋だ。

「橋ですね」

「橋だね」

「この先の堤防沿いは舗装されていないのですね」

「うん。人家以外何も無いからね。あんまり行ったこともない」

「どうりで、ディテールが適当なはずです」

よく見てみると、車道を渡った向こうの道には茶色い地面と草があるだけで、全体的にのっぺりとした印象。石ころのひとつも無い。夢見は懷に手を入れて、

「――取り出したるは日記帳」

「なに持つてきてんだよ！」

しゃがみ込んでページをめくる。取り戻そうとすると、くるくると背を向ける。

「この！ 返せよ！」

「この記述です。六月二〇日、『高架下の捨て犬』とはこの橋のことなのではないですか？」

近所にある川はここしかないし、向こう側に行ったことがあまり無いなら高架下とはずばりこの橋のことだ。

そこまでの推理は驚きに値しないが、彼女が指示するからにそれは記憶の欠落に関することであって、何故本人でもないのにそんなことが判るのだろうと二ノ宮は疑問に思う。

顔に出たのか、夢見は視線を橋の下に向け、

「あなたの銘記に関する傾向は、存在を定義する名称からあると感じたのです。先の未空さんもそうでしたから、名前が無いのはおかしく思いました。勘ですけど」

「名前って、犬の名前？」

「そうです。犬に名前はつけてあげなかったのですか？」

そういえばそうだ。

物に名前が無いと落ち着かないし、クラス全員の名前だって学年が上がるたびすぐ覚えるようにしていたはず。

うんうん唸る二ノ宮を置いて、夢見は堤防を下りていった。煮え切らぬものを感じながらも後に続いた。

果たして橋の下には手付かずのダンボール小屋があり、その周りで獺が一匹鼻をうごめかせていたのである。

「二頭目ゲットなのです」

むんずと捕まえる。背中を叩いて泡を吐かせる。

なんだか、すごい地味な作業じゃないか。

「ずいぶん簡単に見つかったけど、こんなんでもいいの？」

「なんですか。トラブル満載の捕縛劇でも期待してたのですか？」

「いや、嫌だけど。ぜんぜん簡単そうなんだもの。僕にもできそう」

「すこぶる心外なのです。それでちゃんと記憶は取り戻せたのですか？」

「あ……うん」

「犬の名前は？」

黙った。

気まずい沈黙。

気まずいと思っているのは二ノ宮だけなので、夢見は構わず日記帳を開け記述を確認しようとすると、猛烈な勢いで奪い去られた。

「、残像」

「ペスだよ！ ペス！ すごい普通な犬の名前！」

本当はヘンリエッタだけれど、また罵られるのが嫌なので懸命に誤魔化した。

「そうですか。なら名前はピスに改名することを薦めるのです」

「……なんでさ」

「六年生になるまで夜尿症が治らなかった御主人の犬にはぴったりなのです」

ちなみにペスは猫のことです、と付け足して堤防を登っていった。あーもうそうですよ。最高学年に上がるまで寝小便してましたよ。

でもなんでそんなこと知ってるんですかその日記帳は今年のですよ。寝てるあいだに他の日記も読んだでしょ。そうでしょ。ひどい。…さめざめと泣きながら成す術なく後を追う。こんな記憶なら忘れたいのに。

夢であることが救いだった。

次の目的地は学校だった。自転車通学するくらいなのではっきり言って歩きはしんどい。重ねて言うが、二ノ宮に散歩の趣味は無い。

つまりは疲れる。夢のくせに体力値が反映されるなんて理不尽の上ないと訴えれば、呆れと蔑みと嘲りの言葉が陰湿に飛ぶ。もうやだ。おうち帰りたい。

「虐められてませんでした？」

唐突に訊かれた。思い返してみてもそんな記憶は見当がなかった。「それは変なのです。きつとあなたの中学生日記は泥沼だったに違いないのです」

「不吉なこと言うなよ！ 不思議と……あれ、自分で不思議？ なんか負けた気分なんだけど」

「運がいいのです。わからなくはないですけど」

どういふことが問いただしたかったが、恐いのでやめておく。

人家と商店が無秩序に並ぶ狭い通りを、二ノ宮は夢見と歩いていく。陽気が心地良い日和、人の活気だけが無い町で、なんの大事もないふうに、いつもの町並みが通り過ぎていく。

「あのさ、気になったんだけど」

「なんですか？」

「獺が夢の中に入って、人の記憶を食べてしまう。夢見はそうさせないように夢の中に入って、獺を探して捕まえる。僕はその協力をする。……だいたいこんな感じだと思うけど、もうさ、そういうものは『ある』って納得したうえで訊くけどさ」

「何か不備がありますか？」

「どうして、そんなことが起きるの？ 獺ってそんな、病原菌みたいなものなの？」

「良い質問なのです」

何も変化の無い横顔で、前を真っ直ぐ見つめたまま、夢見は言った。

「人の記憶の欠落には、器質性のものと非器質性のものがあるらしいです。精神疾患における記憶障害のカテゴリで、医学的には健忘と呼ばれています。器質性のものは外的要因、つまり直接的な脳へのダメージ、薬物や外傷によって発生するもので、こちらはわりと

ポピュラーです。非器質性のものは心因性、重度のストレスや情緒の未成熟な人に見られる症状で、こちらは滅多に見られません。手術や投薬で回復可能な器質性健忘に対し、心因性健忘の方は治療法が確立していません。催眠療法やカウンセリングなどが主です」

話がいきなり専門的になった。

「夢の話だよね？」

「夢の話ですが、あなた側の世界に表れる症状ですから」

気を落ち着かせる。彼女が今言ったことが前置きであることは解る。それだけに、形のある危うさに二ノ宮は揺さぶられた。どうせ夢の中だからと捨て置くことができないところまで来ているのだ。

「心因性健忘——獺の働きはそれに類するものです」

「て……ことは？」

「あなたの忘れたと思う気持ち、夢の中に獺を招く」

——忘れない？

そんなのはおかしい。

だって、ヘンリエッタの名前も、未空さんの名前も、二ノ宮は一度だって忘れたと思ったことなど無いのだから。心の片隅にも、そんな願望を放置したことはないのだから。

「おかしいと思ってますか？」

「うん……だって、そんなこと僕は」

「言ったはずです。欠落は補完されるものなのです。心に矛盾が生じないよう、他の記憶から継ぎはぎするように、その逆もありうる。あなたに深く関わりのあることは、その矛盾を埋め合わせるために、他の記憶も巻き込んでしまう。あなたはとても大切な夢を食べられてしまった。だから、それを思い出させないように、関連する他の記憶も食べられてしまうのです」

意味が分からない。

大切なのに、忘れてしまう。

大切なのに、自分から忘れたいと願うこと。

「そんなの……あるはずないじゃんか」

「ある。あなたには夢が崩れてしまう出来事があつたのです。それはあなたの心そのものだったから、だから、心の平衡を保つために、それを忘れてしまえと願った。念入りに、思い出すことが無いよう、それ無しでも自らが成立するように」

彼女の言い分は容赦が無かった。

「でも、所詮はその作業もあなたという人格が成立する基盤を侵してしまうものなのです。傷ついた内腑を切り捨てるようなものなのです。たとえ精神のかそせい可塑性に頼っても補いきれるものではないのです。欠落は欠落のまま、あなたの心に穴を空け、認識さえ巻き込んでしまう。あなたは心の動きを失い、それまでの『二ノ宮太助』でいられることができなくなる。それは、放置できない問題だと思いませんか？」

自分が自分でなくなるなんて感覚はわからない。

いつのまにか歩みが止まっていた。三分前にいて、夢見は人の顔を覗き見るように少しだけ身を屈めている。

大切な記憶を、忘れてしまいたいと願った自分。

もし、そんなものがあるとして、だ。

「思い出して、何になるんだ」

scene 4

八つ当たりのような呟きだ。

「忘れたいと思ったから、せつかく忘れられたのに、思い出してどうするんだよ。けっきょく同じことだろ。思い出しても辛いだけなら、自分の得になることなんて何にもないだろ」

「それは間違いです。辛いことなら、心に留めておかなくてはならないのです。また同じような出来事に遭遇したとき、同じように傷付いてしまうのですから。その度にあなたは都合の悪いことを記憶から消し去ってしまうのですか？」

「うるさいよ！ みんながみんなそんなふうに過ごしてると思うんだよ！ 誰だって目を逸らして知らんぷりしてるくらいあるんだ！ それでもちゃんと生きてるんだから、思い出さないで済むことならいちいち掘り起こすことないだろ！」

ムキになって抗弁した。

それは、どう見ても過剰な反応だ。

けれど、彼女の言うことは、精神の基盤を揺るがすものだった。成立した一個人の人格を、否定するものだった。

「あなたのためにやっていることではないのです」

なんら変わらぬ表情で、夢見は冷たく言い放った。

「今は道德の時間でも、倫理の時間でもないのです。ここはあなたの夢の中でも、私が作った世界なのです。ここからいずれ抜け出したいなら……」

「脅迫かよ。探さなくちゃ出してくれないってのか」

「この世界に引き籠もり続けていても、時は変わらず流れていくのです。そのあいだ、あなたはずっと眠り呆けているのです。心配する家族がいるのではないですか？ 獺に記憶を食い尽くされれば、あなたは死んでしまうのですよ？」

「それは、あんたが閉じ込めておくからだろ！」

認めたくなかったのだ。

自分のせいでこうなったことに。

「人のせいにしないで欲しいのです。今のあなたは、まるで子供です」

「うるさい！」

耐えられず、駆け出していた。

夢見を追い越して、一心不乱に道を走った。

いくつも電柱が視界をかすめ、地を蹴る重さが脚に響いた。振り返りもせず、ろくに前を見ようとせず、息が切れて脇腹が痛くなっても、足をくじいて転びそうになっても、まるでそこに留まることが許しがたい暴挙のように、わけもわからず走り続けた。

夢の中なのに、どうして思い通りにならないのだろう。

どうして、嫌なことばかり起こるのだろう。

どこに逃げればいいのだろう。

閉じられた世界の中で、二ノ宮は途方に暮れた。

目的も持たない足が行き着く先に選んだ場所は、自分の通う学校だった。

校門の前でしばらく呆ける。桜の並木が縁取る道の先に、見慣れた校舎が居座っている。沈み込むには陽気の過ぎる日、相も変わらず今日も元気に自分の日常はそこにあった。

この学校で、一年と三ヶ月近く過ごしている。

そろそろ衣替えの季節だというのに、校則は学ランの着用を義務付け、中途半端な暑さにうだる登校中の生徒に向けて体育教師が目を光らせて、その融通の利かなさに多くの不評を買っている。生徒会の挨拶をうるさげにやり過ごしたあと、一時間目はなんだったかなと回りの悪い頭を動かし、クラスの誰かと談笑しながらHRまで過ごすのが一般生徒の朝の習わしだ。例に漏れず二ノ宮もそのクチだった。平日の今日も本当だったらそうして過ごすはずだった。

誰もいない校庭。お馴染みな野球部の朝練風景も見渡す限り存在

しない。そこには寂しさとは違う、ただ場違いな感覚がある。創立記念日の日に学校に来てしまったとか、たまたまこの部活も試合に出払って居ないか休みか、破滅的なまでに遅刻して、どこも体育の授業がなくて、こそこそ校庭の隅を歩いて昇降口に向かう途中か、そのくらの、通常あり得てはならない居心地の悪さだ。

来た道を振り返って、誰も居ないかを確認。

少しやりたいことができたのだ。

校門を抜けて駐輪場を通り過ぎコンクリートの階段を昇った。体育館に沿って歩いて一段低く見積もられた校庭を仰ぎ見ながら、いつの世も不良生徒に踏みにじられる花壇を飛び越え、砂利を踏み散らし昇降口に飛び込んだ。下駄箱に自分の靴を探す。上履きを引張り出してスニーカーと履き替えた。

それはいつもの作業だった。

いつもの作業であるからには、これからの活動も「いつも」に遵守しなければならぬ。

昇降口を出て、すぐ前の階段を昇った。二年生の教室は二回にあるのですぐ近くだ。踊り場を折り返し、二段飛ばしで階段を上り、手洗い場を後にしてふたつ先の教室に後ろの出入口から入った。

教壇の上に教卓あって、その先には湾曲した長い黒板がある。日直の欄には誰の名前も書き込まれていない。カーテンが端まで開き切っていて、窓は全開きだ。折り目正しく人数分の机が整列されており、不真面目な掃除ロッカーが立て付けの悪さを理由に今も扉を半開きにさせている。

二ノ宮は窓際の後ろから二番目の、自分の席に腰掛けた。思い出す。

確か今日は六月二十二日。木曜日。だから昨日は二十一日の水曜日だったはず。

誰もが嫌がるブラックマンデーを乗り切って、そこはかたなく空虚な火曜をやり過ごし、やる気の出ってくる水曜日の朝、遅刻するかしないかギリギリに滑り込み、こんなふうに席に座って安堵の息を

ついていた気がする。昨日のことだが判然としないのは、遅刻までのレッドゾーンを綱渡りし続けるのが二ノ宮の習慣だからで、さして重要ではないと思う。

その日は担任の来るまでが遅かった。朝礼が長引いたとかどうでもいい理由だった。そのあいだ隣の席の大河内と今度出るカードゲームの内容はこんなだったらいいなあ、とか妄想語りをしていた気がする。大河内は趣味のために新聞配達しているくらいで、そのひたむきさに汚染された二ノ宮は、月明けの期末テストで成績アップと引き換えに小遣い増量取引を目論んでいたところだ。

ここまでも大丈夫だった。

差し障りの無いHRが終わって、教室のすぐ前に待機していた数学教師中野が、丸い腹を懸命に逸らし担任と入れ替わった。HRから一時間目が始まるまでの、ほんのささやかな安らぎを踏みにじられたことへ教室の誰もが腹を立てるが、内心で悪態をつくのみに留めるのがこのクラスの取り柄である。

オーバーペース、オーバーウェイトの異名を取る中野の授業は不評だ。黒板の式を消すまでがめちゃくちゃ早いので、大半の生徒は彼の方針に諦めの一手を打っており、前の席と五目並べをしていたり、パラパラ漫画を描いていたり、ルーズリーフで鶴を折ったりしている。二ノ宮はといえば成績が惜しく、黒板の進行は構わずにマイペースで教科書を解き進めていた。

それでも、クラスにひとりやふたりくらいドが付くほど真面目で頭の良い奴はいるのだ。

ノートを取る速さなんか腱鞘炎を起こしかねないほどだし、それでいて雑ではないし、ガリ勉でもなく人当たりも良く、何か隠れてズルしてないかと疑ってしまうような奴が。

そんなクラスの人気者を、少しの嫉妬と、少しの羨望と、少しの劣等感をもって、二ノ宮は輪の外から眺めていた気がする。

名前は思い出せなかった。

顔の輪郭も曖昧。

それでもいいと、今の自分には思える。人間、自分に関わりの薄いことは記憶に留めないものだ。それは、覚えていても仕方のないことだからだ。気に留めていても支障の無いことだからだ。だから今ここに二ノ宮太助は成立しているのだ。それでもいいじゃないかと思う。もし獏が記憶を食らっていたとしても、それ以上忘れさせなければ、記憶は戻らないままでもいいと思える。

机の上で、日記を開いてみた。

六月二十一日——空白。

疲れていようが、眠たかろうが、風邪をひこうが寝る前には気力と根性で一日の記録をつけることにしている自分には、あつてはならないはずのものだ。

大雑把に読み返していく。空白はあちこちにある。だいたいの平日は学校であつた出来事や帰りにどこへ寄り道したとか借りた漫画が面白かったとか、友達とどこそこで遊んだとか、他愛ない事柄で埋められている。変化に乏しく退屈な、それでも平和な自分の時間。休日には、ほとんど何も書いていない。

そこには、今の自分を脅かす何者かの存在があつたはずだ。

日記を閉じて席を立った。

この際だから、自分がいつも過ごしている世界の中で冒険してみようと思った。教室を出て、斜め向かいの配給室にお邪魔する。小学校のときは給食を作る厨房が学校にあつたけれど、中学となると配達になった。他の学校はどうか知らないが二ノ宮が通うところはその手合いだ。一階に運ばれた給食は、搬送エレベーターを通つて上の階まで配られて、四時間目のあいだにいつのまにか仕分けられている。当番になって、この小部屋から給食を運び出すとき、いつもうずうずしていた。一度あのエレベーターに乗ってみたかったのだ。

自分の腰の高さまでもない、上下に開く銀色の扉を見据え、二ノ

宮はいいやボタンを押した。

動かなかった。

待てど暮らせど、扉は開いてくれなかった。

途端につまらなくなつて配給室を後にした。いいのだ。このくらい、なんてことない。まだまだやりたいことはたくさんある。一度も使つたことが無い特別教室や、職員室や、校長室。いつもここにいくせに、見たことの無い場所。校庭の体育倉庫や、出入り禁止の屋上や、生徒会室に放送室、宿泊室や給湯室や図書室奥の秘密の小部屋や――

どれも、開いてくれなかった。

家の前のアパートを思い出す。がらんどうの張りぼての家。

何度か入れてもらつたはずなのに、その中には何も無かつた。記憶の中にある部屋も、形がぼやけてよく思い出せない。

これは私が、あなたの記憶から作り出した夢の世界――

知らない場所は作りようがなかつたのだらう。

曖昧な部分は切り捨ててしまったのだらう

ここは、記憶の中にしかない世界だ。

どう足掻こうが、閉じられた世界のままなのだ。

s c e n e 5

肩に重くのしかかるような憂鬱に見舞われる。ここはけっきょく自分の居場所ではないのだ。かといって他に行く当てがあるわけでもない。どうしたらいいか解らない。何もかもどうでもよくなり、昇降口戻って、虚ろな気持ちのまま靴を引っ張り出したとき、一緒に黄色い紙が落ちてきた。

下駄箱の簀の子の上に、黄色い便箋が落ちていた。
来るとき、こんなものは無かったはずだ。

眠りに落ちる直前のように、意識が奥に沈んでいく。

それは、昨日の出来事。

放課後、帰宅部だった二ノ宮はこれといってすることもなく、すぐ家に帰ろうとした。家に帰ってすることといえば、漫画を読んだりテレビを観たりゲームをしたりする以外になく、だから、帰り際の下駄箱に、秘密の手紙が入るような事態はまず想定外だったし、あらぬ邪推をして怯え、混乱しては動揺していた。

職員便所に引き籠もった。

おそろおそろ開帳した。

丸い字で「放課後、体育館裏まで来てください。ずっと待ってます」と書いてあった。

差出人不明。宛名は二ノ宮。生きた心地がしなかった。死刑執行直前まで処刑方を聞かされず生きる囚人のような気分だった。

逃げ出す。という手もある。

けれど二ノ宮は立ち向かった。イタズラなら心が傷つくけれど、覚悟していれば大丈夫。見知らぬ誰かのリンチなら、黙って殴られるのもよし。痛いのは嫌だけど、それで相手の気が済むのなら大いにすればいいと思う。

二ノ宮は、体育館裏へ赴いた。

裏の通りに面した場所で、垣根も柵のひとつもない、背だけが高

い木に囲まれた薄暗い場所だった。人の通りも少なくなくて、密会にはあまり向かない開放的なロケーション。いじめはないなと胸を撫で下ろす。だからやっぱり告白もないな、と思った。

ひとつだけ背の低い、シダレザクラの影に、女子が一人立っていた。

改まって何の用だろうと、一気に緊張が抜けていった。
知った顔だったからだ。

矛盾が修正されていく。

小学校に入った頃から、ずっと一緒のやつだった。

改まった顔で、しかし何か吹っ切れたように、冗談っ気の欠片もなく、告白された。

彼女の名前は烏丸優。からすまきぐる要領が悪くのんびり家で、けれど人が見て

ないところでは努力家で、一度何かを始めると最後までやり遂げなければ気が済まない影のムードメイカーで、六学年中三度同じクラスになった近所に住んでる幼馴染だ。今でも月に二回以上は遊ぶし、部活の無い日の放課後なんかは遅くまで話し込んでいたりしている。名前が男っぽいことを指摘されると、穏やかに流すのだけれど、内心かなり気にしている大人しい女の子だ。気が合って話しやすいので、ずっと友達付き合いが続いている。

傍から見れば、やはり危ういバランスだったのだろう。

ずっと前から好きでした。もしこの気持ち伝えたら、今までの関係が壊れてしまうと思っていたから、隠してきました。ごめんなさい。

そう言って、悔しげに下を向いた。

どんな言葉をかけたら良いか、まるで分からなかった。

そこまで思い出して、夢から覚めるように意識が戻った。

自分の靴以外が一足も見当たらない灰色の下駄箱。ひび割れだら

けの、プラスチック製の簀の子。土臭い昇降口。足元にはまだ便箋が落ちている。それは逃れようのない現実で、どうしようもないくらい、おかしい夢の中だった。

拾って、その場で開ける。素っ気ない字。「命が惜しくば体育館裏まで来なさい」。

――ふざけやがって。

二ノ宮は体育館の裏まで向かう。いじめにも告白にも、決闘にさえ相応しくない、通りから丸見えの場所に、自分が思うよりも頭に血を上らせて。

そこに夢見は優雅に待ち構えていた。

「本来、こんなやり方は私のポリシーに反するのですが、勝手に夢を掘り起こさせてもらいました。プライバシーは守る主義なのですが」

「嘘つけよ」

彼女はその手に、籠に入った獭を持っていた。

「この子を見つけたのは、たまたまなのです。学校の周りを探していたら、たまたま見つけただけなのです。といっても、記憶がなくなる要因は身近にあるのが常ですから、あなたが特別見つけやすいわけではありません」

「それで、人の頭を勝手に覗いて、手紙？」

「許して欲しいのです」

氣勢が削がれた。頭こそ下げず、抑揚も無かつたくせに、その声には真摯な響きがあったからだ。

「あなたが忘れたいと願い、他人に見られたくない記憶を、無理矢理覗いて掘り起こしたのは本意ではなかったのです。あなたが取り戻したいと願った夢でなければ、覚めたとしてもまた同じことの繰り返しですから」

「じゃあ……なんでこんなことしたんだよ」

「証明するために」

間を置かず答えた。

「忘れたいと願う記憶ほど、心の壁にこびりついて離れないものなのです。それは変えがたい摂理なのです。無理にでも忘れたいなら、その記憶に関わるすべての物事も切り捨てなければなりません。猯が食べた夢の欠片は、すべてあなたが忘れたいと願うことに関連するはずですから、あなたが本当に忘れたかった記憶は、これまでに捕まえた三頭の猯に深く関わるものなのです」

そんなのは解っている。もってまわった言い回しに少々イラつく。

「何が言いたいんだよ」

「ここまでで取り戻した記憶も、忘れたと思いますか？」

すぐに、口に出せなかった。

たぶん、死ぬほど青臭くて、恥ずかしかったから。

アパートのお姉さんとの距離感も、高架下の犬の名前も、忘れたとは思わなかった。無理矢理掘り起こされた優との記憶さえ忘れていたのが恥ずかしい。それを利用されたのは、瞼の裏が熱くなるほど無軌道な憤りを覚える。彼女は大切な友達だったし、その思い出を傷付けたくはなかったのだ。

忘れたくない。

それは自分の、大切な一部だったから。

けれど――

「……今日集めてきた記憶が、その『本当に忘れたかった記憶』の辻褄合わせなら、僕は忘れたままでもいい……。だって、あんな大事なことまで忘れなくちゃいけないくらい、それは、僕にとって守りたかったものだっただろう？　だったら、たとえここで思い出したとしても、現実に戻ってもそれは、良くなつてとは思えないから……」

「あなたにとっては無かったことでも、誰かにとっては在ったことです」

カウンターをもらった。

当たり前の事実を、今更ながら突きつけられた。

自分だけが忘れても、起こったことは変えられない。

「彼女のこと、どう思っていたのですか？」

「……分からない。あの関係が壊れるくらいなら、守りたいって思ってたけど……」

「彼女の気持ちには応えられなかったのですね」

あのとき首を縦に振っても何もおかしいことはなかった。返事を引き延ばすこともできたし、時間は山ほど欲しかった。でも、そうしなかったのだ。あの場で、はっきり、ごめん、無理、と言ったのだ。

「どうしてか、わかりますか？」

「わからない……けど、もう、わからないのはおかしいんだよね……」

記憶の中にある出来事とそれに付随する感情は、否が応にも矛盾していた。好きだったのに、はつきり断ったのは、それが自分の求めた「好き」と違うものだったから。それが自分にとっての在るべき姿ではなかったから。その告白を断ることが、二ノ宮の中の「自然」だったから。

優とは友達。

あまりにも竹を割った結論だ。

他のどんな理由もなく、そんな危うい関係を続けられたとは思えない。

俯いて、物思いにふける二ノ宮を、夢見は変わらない表情で見つめている。

「あなたの夢に招かれた獭は、全部で四頭いるのです」

詰め寄ってきた。

「——なに……？」

「つまり、あとは最後の一头です。その一头が、すべての元凶である記憶を食っているのですよ。あなたの『本当に忘れたかった記憶』を。もう、だいたい見当はついていいるのでしょうか、探す勇氣はあるのですか？」

最後通告に聞こえた。夢見にとってはこの世界から獭さえ取り除

ければそれでいいのだから、わざわざ記憶を戻すのはおまけのようなものなのだろう。なぜだかそんなふうに思った。次の機会はもう与えない、そう言っている。

後には引けない。

実はまだ、望んで思い出したいとも思っていない。

でも、それはただ先を見るのが怖いだけで、

理性はもう、思い出すしかないと告げていた。

「……僕の記憶が、望んで忘れられたものだとしたら、全部思い出したその先で、僕はそれを受け入れられるの……？」

夢見は、どこまでも空っぽな表情で返した。

「私の知ったことではないのです」

情け容赦なく言い捨てる。そりゃそうだという思いが残る。自分の心の弱さなんかを決め付けられる謂れは無いし、他人の、しかも先のことなんて、下手な励ましや慰め以外に期待される言葉は無いのだ。そしてこの少女が、そんな安易な言葉を言わないことは誰の目にも明らかだった。

「ただ、私に分かることは、目が覚めたとしてもあなたが、この夢の中で起こったことを忘れることはない、ただそれだけなのです。事實は受け入れるしかありませんが、納得するかしないかは、やっぱりあなた次第なのですよ」

夢の中なのに、ありもしない幻想の中のくせに、夢も希望もない言葉。

現実には、優しくして欲しいわけじゃなかった。

夢の中に、逃げ場を求めていたわけでもなかった。

——なら、どうして？

思い出そうとする。

あのとき、青い葉をつけたシダレザクラの木の下で、振り向いた先にあったもの。

四つある体育館の非常口。コンクリートのステップの陰。そこには、獏がいた。

「ごめんなさい……」

謝らなければいけなかったのはどう考えても二ノ宮の方で、あまりに大きな居たたまれなさど動揺の極地な心は、そこから先の言い訳を継がせることを許さなかった。どうしようもなく重たい沈黙。何か言わなくちゃいけない、何を言えばいいか分からない、過ぎ去っていく時間の分だけ深みにはまる緊張感が、遠慮なく二ノ宮を苛んでいく。

だから、初めに口火を切ったのは優の方だ。

「こんなことして……今までのままでいられないよね……」

どうしてそうなるのか、十秒ほど悩んで気付いた。

今までのままでいられない。それは今まで通り、友達のままではいられないという意味。相手の気持ちを知ってしまったら、良くも悪くも、今の関係は保てない。そして、二ノ宮はつきりと断った。優の言葉は、決別を想起させるものだった。

そんなのは嫌だった。

そのときの二ノ宮は、清々しいほど考えなしだった。

「……一方的に、そんなの、納得できるわけない。ずっと友達だったのに、こんなことで終わりにしたくないよ」

どれほど身勝手な言い分か、改めなければ気付かなかった。優の告白は確かに青天の霹靂で、断れば別れるしかない成り行きも分かるが、にわかには受け入れがたい。

けれど優にしてみれば、散々迷った挙句決めたことであり、その先で起こり得ることはすでに覚悟のうえだったのだ。

それなのに。

「嫌だ、今までのままでいたい。友達のままでいたいよ……」

どんなに、相手を傷付けるかも知らぬまま。

「だって……優がいなくなったら、どうやって――」

その先は飲み込んだはずだ。言ってはならないことだった。けれど優にはお見通しだったのだ。

瞬間、彼女の顔に浮かんだのは「ああ、やっぱり」という諦めの色だったから。

s c e n e 6

優と遊ぶようになった最初の記憶は曖昧だ。

自然に忘れてしまうほど昔のことで、気が付けば公園の砂場で一緒に城を作っていた。完成が間近になるといつもそこを根城にしているガキ大将に蹴り崩されていたから、被害者意識の共感みたいなものから始まったのかもしれない。

二ノ宮はひ弱な子供だった。今でも違うと言い切れないが、男としての矜持すら簡単には持てないくらい軟弱な子供だった。

まず、他人と競い合うことが苦手だ。身長も低かったので小学校でのあだ名は「チョビ」。遠慮無くまくしたてる同級生にも苦手意識を持ち、友達があまりできず一人遊びが好きで体育の時間はいつも馬鹿にされる対象になった。小学校に入ってから休みの日も家に籠もりきりで本を読んだりして過ごすことが多かった。子供心にもそれは寂しいと思っていて、だから度々外に連れ出してくれる友達存在は、率先して何かをしたがらない二ノ宮にとって普通の子供がそう感じる以上に、やや過剰気味に大切に感じていた。そして、それを自覚もしていた。

話が戻る。大人しく二人で遊ぶことが多かった二ノ宮と優は、近所のガキ大将という「敵」にほとほと困り果てていた。遊び場を変える算段もしたが、砂遊びを楽しむ年齢の子供に行ける場所などたかが知れていて、そこいらはすべてガキ大将の縄張りであり、泣き寝入りして傘下に加わるか、若くして隠遁者に身をやつすか、二つに一つを選ぶしかなかった。

しかし、そこへ救世主が現れる。

名は狩野青葉。
かのあおば

彼女は優の親友で、野生児かと思うくらい日に焼けていて、ショートパンツを履いたガリガリの脚にいくつも絆創膏をつけている、男勝りに活発な、優や二ノ宮とはまるで正反対の人種だった。

親友の声に駆けつけた青葉は、みつつも上のガキ大将に真っ向から勝負を挑んだ。守りを固める取り巻きどもを電撃的に蹴散らして、敵の将に至るや否や五秒も待たずギタギタした。しゃくりを上げるガキ大将にその場で不可侵条約を突きつけ公園から追い出したのだ。二ノ宮には突風のような出来事だった。彼女の武勇はたちまち広がり、あの公園に生意気なヤサ荒らしがいるからと、袖まくりした腕自慢が青葉の前に死屍を築いて、名にし負う聞く狩野を倒し誉れを得ようとした輩はそのことごとくが露と消えた。

青葉は、本来二ノ宮の苦手とする人物だ。

いかにも好戦的で、野蛮な気性だと思っていたからだ。

けれども不思議とそれからは、三人で、行動を共にするようになっていた。

青葉の孤軍奮闘ぶりが後世まで語り継がれ、誰も彼女に挑もうなどという気がなくなってきた頃ようやく二ノ宮は、青葉がそれほど争いを好まない性格だと知るようになった。彼女は人より正義感が強いだけで、根は優しい女の子だったのだ。

青葉はよく二ノ宮と優を外に連れ出して遊んだ。外でする遊びのほとんどは、青葉から教わったようなものだった。虫の取り方も木の登り方も、釣りの仕方、雀の罌の嵌め方も、自転車の乗り方まで、自分にできないことをなんでもできる青葉を尊敬さえしていた。情けないことに、男としての二ノ宮は青葉に育てられたと言っている。

それでもまだ何かと遠慮がちだった。自分から遊びの約束を取り付けるにしても優が間に入らなければいちいち尻込みする始末だった。

青葉はすごいやつなのだ。

元気で明るくてスポーツ万能で、そのくせ成績も良いし面倒見も良くて、誰からも好かれる性格で、自分なんかが対等に付き合っていないか迷わせるくらい良く出来たやつなのだから。

三人一緒に学校へ通い、一緒に遊んで、一緒に勉強して、食べて

寝て、本を読んで、ずっと家族のように過ごしてきた。

それは、数少なかった自慢のひとつ。

自分の中に、他人へ誇れるようなことを何ひとつ持たなかった二ノ宮が、唯一鼻を高くできた思い出のひとつ。

けれど、いつまでも子供のままではいらなかった。

中学に入ってから、人付き合いの仕方が変わった。

いくらなんでも二ノ宮だって、年中女子と一緒にいるのは人並みに恥ずかしいと思うようになっていたし、それぞれ部活に入ってからは会える機会もめつきり減った。他人にどう思われても平気だったのは、無邪気に遊んでこれた時だけで、次第に開いていく距離に寂しさを感じながらも、それが自然な変化なのだと受け入れられるくらいに二ノ宮は成長していた。

だって、一生お別れになるわけじゃないのだから。会おうと思えばいつでも会えるのだから。それで一緒に過ごした時間が無くなるわけじゃないのだから。

——恐らく、ほかの二人は違ったのだろう。

二年になって、優だけ別のクラスになった。

それ以外の变化といえば、青葉が女子バレー部を辞めて文化系に転向したことだ。

辞めたばかりの時こそ、その理由は話してくれなかったけれど、あるとき、なんでもないふうに、愚痴を漏らすように、練習試合中に盗難があつて、その犯人が二年生のグループ全員だったから、と青葉は話した。当時は被害が報告されなかったせいで騒ぎにならなかったけれど、直接それを見てしまった青葉は、部には居られずに進級してすぐ辞めたのだという。顧問には事情を話してから辞めたが、二ノ宮の見聞きする範囲で不祥事の報はされていない。

放課後自由になれる時間が増えたおかげで、また青葉とよく遊ぶようになった。

テニス部の優はそんな二人を「ずるい」と評した。

当の青葉は飄々としたもので、教室でも普通に話して、帰り道の歩も淀みなく、高架下で見つけた捨て犬に名前をつけては可愛がり、向かいのアパートのお姉さんとは相も変わらず剣呑な仲だ。

二ノ宮は変化に敏感である。

それぞれの変化について、三人の中の誰よりも意識していたつもりだ。

だから、変化を認めて、受け入れたうえで、それまでの関係を続けようと努めてきた二ノ宮が、ただひとつ見落としてきたことは、自らの内面にあったのだろう。

青葉はもう、二ノ宮が心底懂れていた人間ではなくなっていたのだ。

一緒に出歩いて、冗談を言い合って、笑い合う身近な存在だったのだ。

傍から見れば、それまでと同じ関係には違いはないはずだ。それでもひしひしと感じていたのだ。前は同じでも、対等じゃなかった。上級生との対立を嫌い、部を辞めて放課後一緒に帰宅する青葉は、それまでの強い正義感をまとった青葉ではなくなっていたのだ。近づくことにいちいち恐れをなしていた彼女ではなくなっていた。

それまで以上に、強固に「友達」であろうとしたのは、もはや意地と言うほかない。

少し距離が開いても、近づいても、三人であることに変わりはない、そう思い込んでいた。

絆が壊れてしまうことだけが、何よりも恐ろしかった。

一度訪れてしまった変化は変えようがない。

二ノ宮が固執していた「三人」という臨界点も、ただ一言で破られて先の手立てを失ってしまう。

「——どうやって、青葉と付き合えばいいか分からない……だよね？」

優は言った。言い当てられて目眩がした。

「そうだよ。太助はわたしたちのこと、大切にしてくれてたものね。どちらとも離れたくないから、友達以上になろうだなんて考えたくなかったんだよね。だからわたしが居なくなったら、青葉と今まで通りの『友達』でいられない。そういうことなんだよね」

もう、全部見抜かれている。

「わたしは太助の歯止めだったんだよね」

意識しまいとしてきたことさえ、心の奥から掘り返されて、逃げ場はどこにもなくなった。優はずっと青葉が二ノ宮にとっての「友達」であることに、利用されていた自分の立場が耐えられなかったのだろう。

だから、そのとき校舎裏で起こることはすべて彼女の計算済みで、自ら均衡を壊すことで、今の関係を終わらせようとしたのだろう。言いたいことも言えぬままひび割れていく枠組みを、さつさと壊してしまいたかったのだ。

「太助は、青葉のことが大好きなものね」

背後で、それほど大きくない音がした。

無視しても良かったのに、振り向いた。外側からは一段高い体育館の、よつつある非常口。コンクリートで出来たステップ。その陰に何かの間違いだと思いたい現実がある。

この場所へ招かれたもう一人の登場人物。狩野青葉はそこにいて、追い詰められたような顔で身を引いていて、二ノ宮が見とめた瞬間、飛び退いて逃げ出していった。

「ほら、行っちゃえ」

それは、あまりにも唐突な出来事で――

身体が動くままに任せ、青葉の後を追いかけていた。

それからどうなるか考えていなかったのは多分青葉も同じだろう。逃げてどうなるのか、追いかけてどうなるのか、捕まえて何をするのか、逃げ切って何を思うのか。

何ひとつまともに頭を使った憶えはなかった。捕まえなくちゃい

けない。二ノ宮はただそれだけの想いに捕らわれて、青葉も恐らく似たような理由で、実入りのない追いかっこはどこまでも続いたようだ。

そこから先の変化はまだない。

誰が悪いとは言えず、行っちゃえば皆に責任はあり、恨むべき相手もおらず、そこから時間は止まったままだ。

「ここが、あなたの終点なのです」

この夢の案内人は、一車線しかない道路の横断歩道に立っている。そのすぐ横にはバス停がある。垣根の植木が横一直線に続いていて、その切れ目から雑草の手入れが行き届いているとは言えない駐車場と、白い塗装がところどころめくれかけた、みすばらしい歯科医院が建っている。

二ノ宮の記憶はそこまでだ。

この道で、停滞している。

青葉が飛び出して、けたたましいブレーキ音と、目を見開いて止まった映像で――

「おめでとうございます。すべての夢を取り戻しましたね」

皮肉のつもりじゃないのだろう。

彼女の役目はそれまでなのだ。

逃げ出して目を逸らしていた現実を突きつけるのが彼女の役目。そこから先は関知しない。だからこれ以上の何かを求めるのは筋違いな話なのだ。

それでも訊ねてしまう。

「……これから、どうしたらいいのかな……どうすればみんなが、お互いを許せるようになるのかな……」

助言を求めるのは間違いだ。彼女はありのままを知らせることしかできないのだから。辛いと感じていた記憶から、目を逸らすなど、痛烈な言葉を投げつけるだけなのだから。

「あなたが悩む必要はないのです」

一点の曇りも無い声で、

「なぜなら、あなたは二ノ宮太助そのものではないのですから」
意味の分からないことを言った。

「あなたは、二ノ宮太助が心の中に描いた肖像なのです。自分はこういう人間だから、こういった考えをする。そうした二ノ宮太助自身のイメージを複写した、この夢の中でしか生きられない存在ということです。騙っていてごめんなさい、と一応謝っておくのです」

「え、ええ？　じゃあ、現実の僕はどうなるんだよ？」

「今ここにいるあなたを使って、現実の二ノ宮太助に上書きします。この夢におけるあなたの役目は、治療法を記した処方箋のようなものなのです。悩んで決めるのは、現実の自分に任せておけばいいのです。それが夢というものですよ」

「そんな乱暴な……結局どっちも僕なら同じことじゃ」

「違います」

断言するのだ。

「ここにいるあなたと、夢から覚めたあなたは違う。記憶を取り戻した今のあなたは自分で思うほど、確たる人間ではないのです。ここで感じた以上に曖昧で、自分の進むべき道を決められない、ウジウジと女々しいやつのはずです」

「余計悪いんだけど……」

「けれどそれゆえに、ここで思う以上に、潔癖でもないのですよ」
どんな理屈だろう。

「具体的に言つと、昨日『いいえ』と言ったことが、今日は『はい』に覆るような節操無しなのです」

夢の中の自分の方がいくらかマシに思えてくる。

「目が覚めればもう答えを持っているかもしれない。ずっと悩んでいたことが嘘のように晴れているかもしれない。理屈に縛られず、自分の思ったままにすることへ迷いを抱いていないかもしれない。現実の脳は頭が良いので、きっと折り合いをつけているのです」

そこまで言われて――

やっとそれが、下手な慰めや、励ましであることに気付いた。

呆れて、馬鹿馬鹿しくなって、少し、救われた。

「もういいよ。わかったから」

「そうですか？ それは結構なのです」

その素っ気無い言い方がおかしくて、初めて夢見に少し興味が沸いた。

「ねえ、夢見は……どうしてこんなことをするの？ 他人のことなんて放っておけばいいのに、どうしてこんな、余計なお節介を焼くの？」

「だから、慈善でやっているわけじゃないのですよ」

人の目を真っ直ぐ見つめて、それでいて、どこを見ているか分からない瞳は、彼女の言葉が真意かどうかを読ませことを叶わせず、

「私は夢の住人ですから、夢を失くされると困るだけなのですよ」

やはり夢のようなことを呟いて、すべての締めくくりとした。

「ではお別れです。良い夢の続きを――」

scene 7 Epilogue

そうして二ノ宮は目を覚ました。

新幹線の中だった。

四人席の窓側に座って、隣の席に荷物を置いて、がらがらの車内で規則的な振動に揺られながら、後ろから前に流れていく夕刻の風景を、起き抜けの目に映していた。

伸びをする。

今日の日付と時刻を確認する。

三月三十一日。午後四時十分。

そう来たか。

事の顛末を話せば、あの日道路に飛び出して車に轢かれたのは二ノ宮で、突き飛ばした青葉はたぶん無事で済んだのだと思う。車のスピードは自転車を流し漕ぎする程度のもだったらしく、頭を打って一時は意識不明だったが一週間寝て過ごしただけで二ノ宮は目覚めたのだ。

あれから一年と半年以上経った。

それでやっと欠落が判明したのには、呆れて笑いがこみ上げてくる。

不幸なことにも、その一週間で父の転勤が急に決まって、眠りかけているうち病院を勝手に移され、目を覚ました後も記憶が抜け落ちたまま新しい生活に溶け込んでしまったのだ。

「記憶の混乱は一時的なものだから実生活に支障は無い」

医者言葉にまんまと騙され、以来優と青葉のことはぽっかり抜けたままだった。

それからしばらくして、親戚の名前を忘れてしまっていたり、家に帰るまでの道を憶えていなかったりで、なんだかんだトラブルが

あつて判明した。

それからの処置は涙が出るほど大袈裟だった。カウンセリングを受けて容態を分析し、医者言うことを鵜呑みにした父は会社に掛け合つて勤め先を元の町へ戻してもらい、受験は無理矢理こつちの高校を受ける羽目にまでなつた。環境を戻してみれば記憶もそのうち戻るかもしれない、という話らしい。

入学式の日取りやら、仕事の引継ぎやら、もろもろの事情で息子だけ先に「帰省」することになったりで、現在家は大忙し。

当事者だからこそ言おう。

お世辞に見ても見切り発車だ。

それ見たことかと思つた。

まさかみんな、新幹線で移動中に、何もかも思い出したとは思わないだろう。

実は二ノ宮のちょっとしたイタズラで、周りがあまりに騒ぐから、後には引けなくなつたのではないか。そんなふうに疑われるのがオチだ。

難儀なものである。

優と青葉は、二ノ宮の記憶がなくなつていたことすら知らない。

移送先で目を覚ましたという報は届いているはずだったが、音沙汰無しなのは十中八九、顔を合わせづらいからだろう。

彼女たちのあいだで決着をつけるのに、一年と半年かかった、というところだろう。

この騒動のきっかけとなつた手紙は今も、鞆の中に眠っている。一緒についてきた写真には、二人の女の子が仲良く並んで写っている。

それでも、どんなかたちで決着しよう——

そこに自分がいなければ、お話にならない。

いつまでも、子供のままではいられないのだから。

夢見のことを思い出す。

ついさっきまでいたのは夢で、目を覚ましてみればまるで現実感の無い出来事だ。

適当な妄想に、自分を誤魔化して続けていたことへの責任を押し付けたかっただけ、ともとれる。

それでも、彼女が、妄想の産物だったとしても、皆が寝静まったころ動き出す、おもちゃの兵隊と同じものだったとしても――

また動かそうと思った。

あの日、横断歩道の上から進まなくなった時間を。

目を逸らしていた現実には、喧嘩を売ってみようと思った。

あの少女の言うとおり、夢の続きを演じてみようと思った。

s c e n e 7 E p i l o g u e (後書き)

だいぶ昔のコミティアで友人に騙されて書いた作品です。
起承転結をしっかりと、という目的で書きました。

<http://fireclock.web.fc2.com/>
こちらのサイトでも公開しているのでよければどうぞ。

初投稿に最後までお付き合いいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9620p/>

Dig me Dream

2011年1月10日23時40分発行